

活動報告書

報告者氏名：八巻 裕 所属：福島県立いわき養護学校 記録日 平成26年2月13日

【対象児（群）の情報】

・学年 小学6年生 日常生活の指導 自立活動を中心とした教育課程

A 障がい名 知的障がい 情緒障がい

B 障がい名 知的障がい 肢体不自由

・障がいと困難の内容

A児：新しいこと、場所、集団が苦手。集団での活動に意識を向けることが難しい。

B児：表情やしぐさでの意思表示。歩行・動作が不安定。余暇の過ごし方が限られている。

【活動目的】

・当初のねらい

A：手先を使う学習や遊びに興味をもち、教師と一緒に取り組むことができる。

B：教師の手を引いたり、実物を持って来たりして要求を伝えることができる。これらより、

①iPad を操作することによる手指の巧緻性の向上、②行動を切り替えるきっかけとして、

③休み時間の過ごし方に広がりをもたせる、④動画撮影し、児童の様子を伝える手段、

として使用することで、2人のねらいを達成し、iPad を活用できるのではないかと考えた。

・実施期間

平成25年5月～平成26年2月

・実施者

八巻 裕

・実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

A児：登校時、休み時間など、特定の場所から中々動こうとしない。教室にいてほしい時、待つてほしい時などは反対に教室を飛び出していくことが多い。

B児：休み時間など、自分から行う遊びが限定されており、手の甲、机の際を見ることで多くの時間を過ごしている。

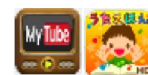
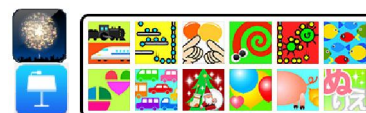
・活動の具体的内容

①として「タップ花火」、エーテックの「知育アプリ」を使用。

朝の会のプログラムカードを「keynote」で提示。

②③④として「my tube」「カメラ」「写真」「うたえほん」を使用。

また、活動にAの意識を向けることを目的として、大集団や学部行事などの際、カメラ機能を通して、行われている活動、発表に注目させる方法で使用した。



・対象児（群）の事後の変化

A児：登校時、iPad を提示することで行動を切り替えるようになった。

給食の時間など待つてほしい場面で iPad を使用しながら待つことができるようになった。

A が使用する際、アプリを起動した状態で渡していたが、不意



な操作やホームボタンを押すなどで、ホーム画面が出た時、自分から iPad のホーム画面をスクロールしたり、使用したいアプリのアイコンをタッチしたりなどの操作を習得することができた。

B 児：家庭で撮影した自分の様子が気に入って見るようになり、リピート再生を手引きで要求するようになった。
iPad を見たい時に、自分で引き出しから出し、持って来る姿も見られている。



【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

A、B とも、iPad を楽しい物と認識したのではないかと。A は iPad があることで、苦手な空間に慣れる、また、活動へ意識を向けることができたのではないかと。また、B について、動画という手段で様子を伝え合うことで、学校と家庭、お互いが知りたい様子を共有できたのではないかと。

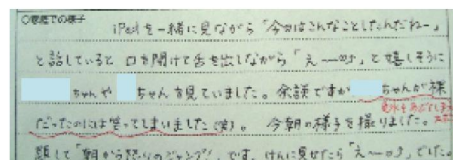
○エビデンス

A・好きなアプリを探してアイコンをタッチする動作の様子を、学年の誕生会の場で発表した。その場から離れてしまうことも多い集団の中で、普段通りに操作し、落ち着いて発表することができた。

・学部行事や集会活動の際、カメラ機能を使用し、その場の活動や発表を、iPad を通して見ることで、意識を向けることができた。



B・定期的に B の様子を撮影し、家庭に持たせることで、学校の様子をより詳しく知り、家庭でも撮影してもらったことで、学校でより詳しく知ることができた。



○その他のエピソード

A は 4 月当初、体育館や特別教室など、場所や集団が変わると、活動や内容に意識を向けにくいという実態があった。実践していく中で、自分の教室では、iPad で撮影した動画を見たり、アプリを使用したりと、A にとって iPad の存在が大きくなっていったこともあり、苦手とする場所や集団の中でも、iPad を通して意識を向けられるよう、カメラアプリを起動して見るようにした。学部集会、交通安全教室、芸術鑑賞教室、学年での誕生会、絵本の読み聞かせなどでその方法をとったが、実物と自分の距離がかなりある状況でも、目の前の映像を見ることで活動が身近になり、また、意識も向けることができていた。さらに、映像を見ることで意識が十分に向けられている場合は、途中で iPad がいない状態になっても、継続して意識を向けることができていた活動もあった。

【今後の見通し】

iPad を学校生活の中で使用することで、A、B 両者とも、興味・関心の広がりが見られたと感じている。特に A が iPad の操作を自ら習得し、使用したいアプリを選択、起動することができるようになったことについては非常に驚いている。また、興味のある iPad 中の映像→実際の集団での活動へと意識を向けることは有効な手段であった。さらに休み時間など、学級に訪れる他の児童と 2 人が、iPad を介してかわりをもつなど、交流の機会も見られた。今後、さらに iPad の利便性を伝えていくことで、本校でも、学校所有、教師の使用頻度の広がりを期待したい。